

孔子 世家

孔子は魯の昌平郷の陬（スウ）邑に生まる。其の先は宋人なり。孔防叔と曰う。防叔、伯夏を生む。伯夏、叔梁紇を生む。紇、顔氏の女と野合（礼を簡略にした結婚）して孔子を生む。尼丘に禱り、孔子を得たり。

魯の襄公二十二年にして孔子生まる（二十一年の誤り、年代は二十一年で計算している）。生まれて首上圩（ウ）頂（頭の頂上の中央が窪んでいること）なり。故に因って名づけて丘と曰うと云う。字は仲尼、姓は孔氏。丘生まれて、叔梁紇死し、防山に葬る。防山は魯の東に在り、是に由り孔子、其の父の墓處を疑う。母、之を諱むなり（母は礼を略して結婚したので、それを諱み嫌い、孔子に墓處を教えなかった）。孔子、兒為りしとき嬉戯するに、常に俎豆（俎は犠牲を載せる台、豆は肉や穀類を盛る器。共に祭器）を陳ね、礼容を設く（礼にかなっていた）。孔子の母死す、乃ち五父（地名）の衢（ク、ちまた、四つ辻）に殯（ヒン、かりもがり）す。蓋し其れ慎むなり。聊（スウ）人輓父（葬車を挽く人）の母、孔子に父の墓を誨（おしえる）う。然る後、往きて防に合葬す。孔子、要絰（ヨウ・テツ、要は腰、絰は麻の帯、腰に絰を巻いて喪服をあらわす）す。季氏、士を饗し、孔子與り往く。陽虎、緇けて曰く、「季氏は士を饗す。敢て子を饗するに非ず。」孔子是に由り退く。孔子年十七なり、魯の大夫孟釐子病みて且に死せんとし、其の嗣懿子を誡めて曰く、「孔丘は聖人の後なり、宋に滅べり。其の祖弗父何は始め宋を有ちて嗣ぐべきを厲公に譲る。正考父に及びて戴・武・宣公を佐け、三命せられ（一命で士、再命で大夫、三命で卿と為る）茲々益々恭す。故に鼎の銘に云う、『一命せられて僂（ロウ、かがむ）し、再命せられて偃（ウ、僂よりも更にかがむ）し、三命せられて俯し（首を垂れて更に低くかがむ）、牆に循いて走り、亦た敢て余、侮らる無し。是（鼎）に饘（セン、濃いかゆ）し、是に粥（シュク、ゆるいかゆ）し、以て余の口を餽（コ）せん。』其の恭しきこと是の如し。吾聞く、聖人の後は、世に當らずと雖も、必ず達する者有り、と。今孔丘は年少くして礼を好む。其れ達する者ならんか。吾即し没せば、若必ず之を師とせよ。」釐子卒するに及びて、懿子、（魯人、衍文）南宮敬叔（懿子の弟）と與に、往きて礼を学ぶ。是の歳、季武子卒し、平子代わりて立つ。孔子、貧しく且つ賤し。長ずるに及びて、嘗て季子の史と為り（“季子史”は恐らく“委吏”の誤りであろう。索隱に、趙岐曰く、「委吏は委積を主る倉庫の吏なり。」とある。）、料量平らかなり（料はます、量ははかり。枘と秤の計り方が公平であった）。嘗て司職の吏（犠牲にする六畜乃ち牛・羊・豕・鶏・馬・犬を飼育する官）と為りて畜蕃息す。是に由り司空（水土を司る官）と為る。已にして魯を去り、齊に斥けられ、宋・衛に逐われ、陳・蔡の間に困しみ、是に於いて魯に反る。孔子は長け、九尺有六寸、人

	<p>皆之を長人と謂いて之を異（あやし）とす。魯復た善く待つ、是に由り魯に反る。魯の南宮敬叔、魯君に言いて曰く、「請う、孔子と與に周に適かん。」魯君、之に一乗車、両馬、一豎子を與う。俱に周に適きて礼を問う。蓋し老子を見ると云う。辞して去るに、老子、之を送りて曰く、「吾聞く、富貴なる者は人を送るに財を以てし、仁人なる者は人を送るに言を以てす、と。吾、富貴なること能わざるに、仁人の号を窃み、子を送るに言を以てせん、曰く、『聡明深察なれども死に近い者は、人を議するを好む者なり。博弁広大なれども其の身を危くする者は、人の悪を発（あばく）く者なり。人の子為る者は、以て己を有する母かれ（あまり強い自我を持ってはいけない）、人の臣為る者は、以て己を有する母かれ。』」孔子、周自り魯に反りて、弟子稍く益々進む。是の時や、晋の平公は淫にして、六卿、権を擅にし、東のかた諸侯を伐つ。楚の靈王は兵彊く、中国を陵轍（侵犯する）す。齊は大にして魯に近し。魯は小弱なり、楚に附けば則ち晋怒り、晋に附けば則ち楚、来りて伐つ。齊に備えずんば、齊の師、魯を侵す。</p>
522	<p>魯の昭公の二十年、而して孔子は蓋し年三十なり。齊の景公、晏嬰と與に來たり魯に適き、景公、孔子に問いて曰く、「昔、秦の穆公、国は小にして處は僻なり、其の霸たりしは何ぞや。」對えて曰く、「秦、国は小なりと雖も、其の志は大なり。處は僻なりと雖も、行いは中正なり。身（みずから）ら五殺（ゴ・コ、百里奚のこと、秦本紀の穆公五年の条参照）を挙げ、之に大夫を爵し、纆紲（ルイ・セツ、縄でつなぐの意で、罪人のこと）の中より起こし、與に語る事三日、之に授くるに政を以てせり。此れを以て之を取る。王（王業）たりと雖も可なり、其の霸たるは小なり。」景公説ふ。</p>
517	<p>孔子年三十五、而して季平子、郈昭伯と鷄を闘わせしを以ての故に、罪を魯の昭公に得たり。昭公、師を率いて平子を撃つ。平子と孟氏・叔孫氏との三家、共に昭公を攻む。昭公の師敗れ、齊に奔る。齊、昭公を乾侯に處く。其の後頃之して魯乱る。孔子、齊に適き、高昭子の家臣と為り、以て景公に通ぜんと欲す。齊の太師（樂官の長）と樂を語り、韶の音（舜の樂）を聞き、之を学ぶこと三月にして、肉の味を知らず。齊人、之を称す。景公、政を孔子に問う。孔子曰く、「君は君たり（君らしく）、臣は臣たり、父は父たり、子は子たり。」景公曰く、「善きかな。信に如し君は君たらず、臣は臣たらず、父は父たらず、子は子たらずんば、粟有ると雖も、吾、豈得て諸れを食らわんや。」他日、又復た政を孔子に問う。孔子曰く、「政は財を節するに在り（節約し適切に用いる）。」景公説ふ。將に尼谿の田を以て孔子を封せんと欲す。晏嬰進みて曰く、「夫れ儒者は滑稽（巧言多弁）にして軌法（規範）とす可からず。倨傲（傲慢不遜）にして自らに順う（自</p>

分の思い通りにする)。以て下と為す可からず。喪を崇び哀しみを遂げ、産を破り葬を厚くす。以て俗と為す可からず。游説乞貸す(諸国を遊説し、財物を乞うたり、借りたりする)。以て国を為む可からず。大賢(ここでは、文王、周公旦を指す)の息みし自り、周室既に衰え、礼樂の缺けて間有り。今、孔子は容飾(容儀修飾)を盛んにし、登降(階段の上り下り)の礼、趨詳の節(両臂を張って小走りに進む姿)を繁くす。累世其の学を殫(つくす)くすこと能わず。当年、其の礼を究むること能わず。君、之を用い以て齊の俗を移さんと欲するは、細民に先んずる所以に非ざるなり。」後、景公、敬みて孔子を見るも、其の礼を問わず。異日、景公、孔子を止めて曰く、「子を奉ずるに季氏を以てすることは、吾、能わず。季・孟の間を以て之を待たん(孔安国曰く、魯の三卿は、季氏、上卿為りて、最も貴く、孟氏は下卿為りて、事を用いず。之を待つに二者の間を以てするを言うなり)。」齊の大夫、孔子を害せんと欲す。孔子、之を聞く。景公曰く、「吾老いたり、用うること能わず。」孔子遂に行り、魯に反る。孔子年四十二、魯の昭公、乾侯に卒し、定公立つ。定公立ちて五年、夏、季平子卒し、桓子嗣ぎて立つ。季桓子、井を穿ち、土缶(ド・フ、腹が大きく、口が小さい土製の器、酒器として用いる)を得たり。中、羊の若しあり。仲尼に問いて云う、「狗を得たり。」仲尼曰く、「丘が聞く所を以てすれば、羊なり。丘、之を聞く、木石(山のこと)の怪は夔(キ、一足獣で人に似ていて山に住んでいる)・罔聞(モウ・リョウ、好んで人の声を真似る山の精)、水の怪は、龍(神獣で常に見えない)・罔象(人を食らう怪物)、土の怪は、墳羊(未だ雌雄に分かれていない羊)、と。」呉、越を伐ち、会稽を墮(こぼつ)ち、骨を得たり、節(骨の一節)、車を専らにす。呉、使いをして仲尼に問わしむ、「骨は何れの者が最も大なる。」仲尼曰く、「禹、羣神を会稽山に致し、防風氏後れて至る。禹、殺して戮す。其の節、車を専らにす。此れを大なりと為す。」呉の客曰く、「誰をか神と為す。」仲尼曰く、「山川の神は、以て天下を綱紀する(国を治めること)に足るもの、其の守を(山川の祀りを守るもの)を神と為す社稷を公侯と為す(王肅曰く、但、社稷を守りて山川の祀り無き者は、直、公侯と為すのみ。)。皆王者に属す。」客曰く、「防風は何れの守ぞ。」仲尼曰く、「汪罔氏の君にして、封・禺の山を守れり。鼈姓と為す。虞・夏・商に在りては汪罔と為し、周に於いては長翟と為し、今は、之を大人と謂う。」客曰く、「人の長は幾何ぞ。」仲尼曰く、「ショウ(”にんべん“に”焦“)僂氏は三尺、短きの至りなり。長き者は之に十を過ぎず、数の極まりなり。」是に於いて呉の客曰く、「善きかな、聖人なり。」桓子の嬖臣の仲梁懐と曰うもの、陽虎と隙有り。陽虎、懐を逐わんと欲し、公山不狃(ジュウ)、之を止む。其の秋、

	<p>懐、益々驕り、陽虎、懐を執らう。桓子怒り、陽虎、因って桓子を囚え、與に盟いて之を醜（ゆるす）す。陽虎、此れに由り益々季氏を軽んず。季氏も亦た公室を僭（おかす）し、陪臣が国政を執り（季氏が公室を凌いで国政に当っており、実質的には季氏の家臣である用虎が政治を動かしていた）、是を以て魯、大夫自り以下皆僭して正道を離る。故に孔子仕えず、退きて詩書礼楽を脩め、弟子彌々衆く、遠方自り至り、業（学業）を受けざるもの莫し。</p>
502	<p>定公八年、公山不狃、意を季氏に得ず、陽虎に因りて乱を為し、三桓の適を廢し、更に其の庶孽（ショ・ゲツ、本来は妾の子の意味であるが、ここでは単に庶子を指す）の陽虎の素より善くする所の者を立てんと欲し、遂に季桓子を執らう。桓子、之を詐わり、脱ぐるを得たり。</p>
501	<p>定公九年、陽虎勝たず、齊に奔る。是の時孔子年五十。公山不狃、費（地名、季氏の領地）を以て季氏に畔き、人をして孔子を召さしむ。孔子、道に循うこと久しきに彌（わたる）り、温温（学徳の深く備わった形容）たれども試みる所無く、能く己用いらる莫く、曰く、「蓋し周の文・武は豊鎬より起こりて王たり。今費は小なりと雖も、儻（もし）しくは庶幾（ちかい）からんか。」往かんと欲す。子路説ばず、孔子を止む。孔子曰く夫の我を召すは、豈に徒らならんや。如し我を用いば、其れ東に周を為さんか（東方に周の道を行う）。」然れども亦卒に行かず。其の後、定公、孔子を以て中都の宰と為す。一年して、四方皆之に則る。中都の宰由り司空と為り、司空由り大司寇と為る。</p>
500	<p>定公十年春、齊と（及は與）平らぐ。夏、齊の大夫黎鉏、景公に言いて曰く、「魯、孔丘を用う、其の勢いは齊を危くせん。」乃ち使いをして魯に好会を為し、夾谷に会せんと告げしむ。魯の定公且に乗車（平常に使用する車）を以て好往せんとす。孔子、相の事（会議の礼をたすけること）を撰し、曰く、「臣聞く、文事有る者は、必ず武備有り、武事有る者は、必ず文備有り、と。古は諸侯、疆を出づるときは、必ず官を具え以て従う。請う、左右の司馬を具えん。」定公曰く、「諾。」左右の司馬を具え、齊侯に夾谷に会す。壇位を為ること、土階三等（土の階段で三段）、会遇の礼（簡略の礼）を以て相い見え、揖讓して登る。獻酬の礼（酒のやり取りの礼）畢る。齊の有司、趨りて進みて曰く、「請う、四方の楽を奏せん。」景公曰く、「諾。」是に於いて旌旄（指揮する旗）、羽袂（ウ・フツ、舞する者が手に執るる羽でできた具）矛戟劍撥（ハツ、大きい楯）、鼓噪して至る。孔子、趨りて進み、歴階（足をそろえずに、一段ずつ登る、礼に反した登り方）して登り、一等を尽くさずして（最後の一段を登りきらずに）、袂を挙げて言いて曰く、「吾が兩君、好会を為すに、夷狄の楽、何為れぞ此</p>

に於いてせん。請う、有司に命ぜん。」有司、之を（孔子）卻くれども、去らず。則ち左右に晏子と景公を視る。景公、心に忤（はじる）じ、磨（さしまねく）きて之を去らしむ。頃有りて、齊の有司、趨りて進みて曰く、「請う、宮中の樂を奏せん。」景公曰く、「諾。」優倡（役者）侏儒（短小の人）、戯を為して前む。孔子、趨りて進み、歴階して登り、一等を尽くさずして、曰く、「匹夫にして諸侯を熒惑（ケイ・ワク、まどわす）する者は當に誅すべし。請う、有司に命ぜん、」有司、法を加え、手足、處を異にす。景公懼れて動き（動揺）、義の若かざるを知る。帰りて大いに恐れ、其の群臣に告げて曰く、「魯は君子の道を以て其の君を輔く、而るに子は独り夷狄の道を以て寡人に教え、罪を魯君に得しむ。之を為すこと奈何せん。」有司、進み對えて曰く、「君子は過ち有れば則ち謝するに質（実質的なもの）を以てし、小人は過ち有れば則ち謝するに文を以てす。君、若し之を悼まば、則ち謝するに質を以てせよ。」是に於いて、齊侯乃ち侵しし所の魯の鄆・汾陽・龜影の田を帰し以て過ちを謝す。

497 定公十三年夏、孔子、定公に言いて曰く、「臣は甲を蔵する無く、大夫は百雉の城（高さ一丈、長さ一丈の城壁を堵といい、三堵を雉という。故に百雉は高さ一丈、長さ三百丈の城）毋し。」仲由をして季氏の宰と為らしめ、將に三都（季氏の都城の費、孟孫氏の都城成、叔孫氏の都城郈）墮（こぼつ）たんとす。是に於いて叔孫氏先ず郈を墮つ。季氏將に費を墮たんとす。公山不狃・叔孫輒、費人を率いて魯を襲う。公と三氏（季孫・孟孫・叔孫）とは季氏の宮に入り、武子の臺に登る。費人、之を攻めて、克たず、入りて公の側に及ぶ。孔子、申句須・樂頎に命じて、下りて之を伐たしむ。費人北ぐ。国人、之を追い、諸を姑蔑に敗る。二氏（公山不狃・叔孫輒）齊に奔り、遂に費を墮つ。將に成を墮たんとす。公斂處父、孟孫に謂いて曰く、「成を墮たば、齊人必ず北門に至らん。且つ成は孟氏の保鄆（支えとなる場所）なり。成無くんば是れ孟氏無からん。我將に墮たざらんとす。」十二月、公、成を囲み、克たず。

496 定公十四年、孔子年五十六、大司寇由り撰相の事を行いて、喜色有り。門人曰く、「聞く、君子は禍至れども懼れず、福至れども喜ばず、と。」孔子曰く、「是の言有り。其の貴きを以て人に下るを楽しむ、と曰ずや。」是に於いて魯の大夫の政を乱せる者の少正卯を誅す。国政を與り聞くこと三月にして、羔（コウ、子羊）豚を粥（鬻に通じて、ひさぐ）ぐ者、賈（あた）いを飾らず、男女の行く者は塗（みち）を別にし、塗に遺ちたるを拾わず、四方の客の邑に至る者は有司に求めざれども、皆之に予え以て帰らしむ（役人に頼まなくても、必用な物を与えて帰らせるようになった）。齊人聞きて懼れて、曰く、「孔子、政を為さば、必ず覇たらん。覇たらば則

ち我が地は焉れに近し、我は之れ先ず并せられん。蓋ぞ地を致さざる。」
黎鉏曰く、「請う、先ず嘗（こころみ）に之を（孔子の執政を）沮（はばむ）まん。之を沮みて可ならずんば則ち地を致すも、庸（なんぞ）ぞ遅からんや。」是に於いて斉国中の女子の好（みめよし）き者八十人を選び、文衣を衣せて、康楽（舞曲の名）を舞わせ、文馬三十駟（駟は四頭、乃ち百二十頭）、魯君に遺る。女楽文馬を魯の城南の高門の外に陳ぬ。季桓子、微服して往きて観ること再三、受けんとし、乃ち魯君に語げて、周道の游を為し（道を巡り歩いて遊ぶ）、往きて観ること終日、政事に怠る。子路曰く、「夫子、以て行る可し。」孔子曰く、「魯は今且に郊（郊祭）せんとす。如し膳（ハン、祀りに供えた肉、ひもろぎ）を大夫に致さば、則ち吾猶ほ以て止まる可し。」桓子卒に斉の女楽を受け、三日政に聴かず。郊して、又膳俎（俎は膳を載せる台）大夫に致さず。孔子遂に行り、屯に宿す。而して師（太師、楽官の長）の己（人名）、送りて、曰く、「夫子は則ち罪に非ず。」孔子曰く、「吾歌わん。可ならんか。」歌いて、曰く、「彼の婦の口、以て出で走る可し（女の口は人を害するので恐ろしい、逃げ去るべきである）。彼の婦の謁、以て死し敗る可し（謁は請謁でおねだり、請謁は情に流され身を亡ぼし国を乱す）。蓋（なんぞ）優なるかな游なるかな（優游の言葉を分けて表現している、のどかでのんびりしていること）。維に以て歳を卒えん。」師の己反る。桓子曰く、「孔子亦た何をか言いし。」師の己実を以て告ぐ。桓子、喟然として歎じて曰く、「夫子、我を罪するに羣婢の故を以てするかな。」孔子遂に衛に適き、子路の妻の兄顔濁鄒の家を主とす。衛の靈公、孔子に問う、「魯に居りしとき禄を得たること幾何ぞ。」對えて曰く、「奉粟六萬なりき、」衛人も亦た粟六萬を致す。居ること頃之して、或ひと孔子を衛の靈公に譖る。靈公、公孫余假をして一出一入せしむ（索隱曰く、兵杖を以て出入し、以て夫子を脅すことを謂うなり）。孔子、罪を獲ることを恐れ、居ること十月にして、衛を去る。將に陳に適かんとし、匡を過ぐ。顔刻、僕と為り、其の策（鞭）を以て之を指して曰く、「昔、吾、此こに入りしは、彼の缺に由りしなり。」匡人、之を聞き、以て魯の陽虎と為す。陽虎、嘗て匡人を暴せり。匡人、是に於いて遂に孔子を止む。孔子の状は陽虎に類たり。焉を拘うること五日。顔淵後る（孔子の一行とはぐれていたのが追いついた）。子曰く、「吾、汝を以て死せりと為す。」顔淵曰く、「子在すに、回、何ぞ敢て死せん。」匡人、孔子を拘るること益々急にし（拘束をより厳しくした）、弟子懼る。孔子曰く、「文王既に没し、文（人たるべき道の総称）は茲に在らずや。天の將に斯の文を喪（ほろぼす）さんとするや、後死者（文王より後に死す者で、孔子自身を指す）、斯の文に與るを得ざらんや。天の未だ斯の文を喪さざるや、

匡人、其れ予を如何せん。」孔子、従者をして衛に寧武子の臣と為らしめ、然る後去るを得たり。去りて即ち蒲を過ぐ。月余して、衛に反り、蘧伯玉の家を主とす。靈公の夫人に南子なる者有り。人をして孔子に謂わしめて曰く、「四方の君の寡君と兄弟と為らんと欲するを辱とせざる者は、必ず寡小君（諸侯の夫人、ここでは南子）に見ゆ。寡小君も見んことを願えり。」孔子、辞謝するも、已むを得ずして之に見ゆ。夫人、絺帷（絺は葛の布、葛の布で作られた薄い帷）の中に在り。孔子、門に入り、北面して稽首す。夫人、帷中自り再拜す。環珮（バイ、おびる）の玉声（腰に珮びた飾り玉が触れ合って出る音）、璆然（キュウ・ゼン、清いさわやかな響き）たり。孔子曰く、「吾、郷（さきに）に見えざらんと為せり、之に見えて礼答せり。」子路説ばず。孔子、之に矢（のべる）べて曰く、「予、不らざる所の者ならば、天、之を厭（たつ、厭いて捨て去る）たん、天、之を厭たん。」衛に居ること月余、靈公、夫人と車を同じうし、宦者雍渠、参乗して出づ。孔子をして次乗（後ろの車に乗って御伴する）と為らしめ、市を招搖（自由気ままに歩き回る）し、之を過ぐ。孔子曰く、「吾、未だ徳を好むこと色を好むが如き者を見ざるなり。」是に於いて之を醜じ、衛を去り、曹に過る。是の歳、魯の定公卒す。孔子、曹を去り宋に適き、弟子と與に礼を大樹の下に習う。宋の司馬桓魋（タイ）、孔子を殺さんと欲し、其の樹を抜く。孔子去る。弟子曰く、「速やかにす可し。」孔子曰く、「天、徳を予に生ず。桓魋其れ予を如何せん。」孔子、鄭に過り、弟子と相い失い、孔子、独り郭の東門に立つ。鄭人の或もの子貢に謂いて曰く、「東門に人有り。其の顙（ひたい）は堯に似たり、其の項は臯陶（舜に臣）に類し、其の肩は子産に類す。然るに要（腰）自り以下は禹に及ばざること三寸、纍纍（ルイ・ルイ、疲労失意の様子）として喪家の狗の若し。」子貢、実を以て孔子に告ぐ。孔子、欣然（キン・ゼン、楽しんで笑う）として笑いて曰く、「形状は未だし、而るに喪家の狗に似たりと謂えるは、然りかな、然りかな。」孔子、遂に陳に至り、司城の貞子の家を主とす。歳餘にして、呉王夫差、陳を伐ち、三邑を取りて去る。趙鞅、朝歌を伐つ。楚、蔡を囲み、蔡、呉に遷る。呉、越王句踐を会稽に敗る。隼、陳の廷に集（とまる）りて死す。楛矢（コ・シ、楛は木の名前、楛で作った矢）、之を貫けり。石磐（石の矢じり）にして、矢の長けは尺有咫（シ、八寸）なり。陳の湣公、使いをして仲尼に問わしむ。仲尼曰く、「隼の来ること遠し。此れ肅慎（古の国の名）の矢なり。昔、武王、商に克ち、道を九夷百蛮に通じ、各々をして其の方賄（ハウ・カイ、地方の産物）を以て来たり貢がせしめ、職業を忘るること無からしむ。是に於いて肅慎、楛矢石磐を貢ぐ、長けは尺有咫なり。先王（周の武王）、其の令徳を昭かにせんと欲し、肅慎の

矢を以て大姫（武王の長女）に分ち、虞の胡公に配して緒を陳に封ず。同姓に分かつに珍玉を以てし、親を展（重い）んず。異姓に分かつに遠方の職（貢物）を以てし、服（服従）を忘ること無からしむ。故に陳に分かつに肅慎の矢を以てせしなり。」試みに之を故府に求むるに、果たして之を得たり。孔子、陳に居ること三歳、晋・楚、疆きを争い、更々陳を伐ち、呉、陳を侵すに及びて、陳、常に寇を被る。孔子曰く、「帰らんか、帰らんか。吾が党の小子（吾が郷党の門人たち）、狂簡（志は遠大だが才は疎略）にして、進取して其の初を忘れず。」是に於いて孔子陳を去る。蒲に過り、公叔氏の蒲を以て畔くに会う。蒲人、孔子を止む。弟子に公良孺なる者有り、私車五乗を以て孔子に従う。其の人と為りは長賢にして勇力有り、謂いて曰く、「吾、昔、夫子に従いて難に匡に遇い、今又、難に此ここに遇う、命なるのみ。吾、夫子と再び難に罹うより、寧ろ戦いて死せん。」闘うこと甚だ疾し。蒲人懼れ、孔子に謂いて曰く、「苟くも衛に適く母かれ、吾、子を出ださん。」之と盟う。孔子を東門より出だす。孔子遂に衛に適く。子貢曰く、「盟は負く可けんや。」孔子曰く、「要盟（強制された盟）なり。神聴かず。」衛の靈公、孔子の来るを聞きて、喜びて郊迎し、問いて曰く、「蒲は伐つ可きか。」對えて曰く、「可なり。」靈公曰く、「吾が大夫は以て不可と為す。今、蒲は衛の晋・楚を待つ所以なり（晋楚の侵略を待ち受ける場所である）。衛を以て之を伐つは、乃ち不可なること無からんか。」孔子曰く、「其の男子は死するの志有り（衛のために死ぬ覚悟がある）、婦人は西河を保つの志有り。吾が伐つ所の者は四五人を過ぎず。」靈公曰く、「善し。」然れども蒲を伐たず。靈公老い、政に怠り、孔子を用いず。孔子喟然として歎じて曰く、「苟くも我を用うる者有らば、朞年（朞は期と同じ、一年）にして已まん、三年にして成る有らん。」佛肸（ヒツ・キツ）、中牟（趙簡子の邑）の宰と為る。趙簡子、范・中行を攻めて、中牟を伐つ。佛肸畔き、人をして孔子を召さしむ。孔子往かんと欲す。子路曰く、「由、諸を夫子に聞けり、其の身親ら不善を為す者は、君子入らず（仲間になる）、と。今、佛肸は中牟を以て畔き、子は往かんと欲するは、之を如何。」孔子曰く、「是の言有り、堅きを曰わずや、磨すれども磷（うすらぐ、石が磨り減って、うろこの様に薄くなること）がず。白きを曰わずや、涅（デツ、そめる）すれども淄（くろむ、黒く染まること）まず、と。我豈に匏瓜（ホウ・カ、にがい瓜で、人に食べられない）ならんや。焉ぞ能く繁（かかる）りて、而も食われざらん。」孔子、磬（ケイ、石の打楽器）を撃つ。蕢（あじか、草や蔓で作ったもっこ。蕢を荷っている者は隠遁している君子であると言われていた）を荷いて門を過ぎる者有り、曰く、「心有るかな、磬を撃つや。硲硲（コウ・コウ、かたくなな人

物、小人の形容) たり、己を知る者莫きかな、而ち已まん (かたくなな態度を捨てればよいのに)。孔子、琴を鼓するを師襄子に学ぶ。十日進まず (他の曲に進まない)。師襄子曰く、「以て益す可し。」孔子曰く、「丘、已に其の曲を習えり。未だ其の数を得ざるなり。」問く有りて、曰く、「已に其の数を習えり。以て益す可し。」孔子曰く、「丘、未だ其の志を得ざるなり。」問く有りて、曰く、「已に其の志を習えり。以て益す可し。」孔子曰く、「丘、未だ其の人と為りを得ざるなり。」問く有りて、曰く、「穆然 (深く静かに思い考える様子) として深く思う所有り。怡然 (イ・ゼン、心楽しむ様子) として高く望みて遠く志す所有り。」曰く、「丘、其の人と為りを得たり。黯然 (アン・ゼン、黒い貌) として黒く、幾然 (すらっとして背が高い) として長く、眼は望羊 (望洋と同じ、遠くを眺める形容) の如く、四国に王たるが如し。文王に非ずんば、其れ誰か能く此れを為さん。」師襄子席を辟けて再拝して、曰く、「師 (師襄子の師匠) も蓋し文王の操 (琴の曲譜) なりと云えり。」孔子既に衛に用いらるるを得ず。将に西して趙簡子に見えんとす。河に至りて竇鳴犢 (トウ・メイ・トク) ・舜華の死せるを聞き、河に臨みて歎じて曰く、「美なるかな水、洋洋乎たり。丘の此れを濟 (わたる) らざるは、命なるかな。」子貢、趨りて進みて曰く、「敢て問う、何の謂いぞや。」孔子曰く、「竇鳴犢・舜華は晋国の賢大夫なり。趙簡子、未だ志を得ざるの時、此の兩人を須ちて、後に其の已に志を得たる及びて、之を殺し乃ち政に従う。丘之を聞く、胎を刳 (さく) き夭を殺せば、則ち麒麟、郊に至らず。澤を竭くし、漁を涸くせば、則ち蛟龍、陰陽を合せず (陰陽が調和しなくて雨が降らない)。巢を覆して卵を毀てば、則ち鳳皇翔けず、と。何となれば則ち其の類を傷うを諱めばなり。夫の鳥獸の不義に於いてや尚ほ之を辟くるを知る、而して況や丘をや。」乃ち還りて陬 (スウ) 郷に息いて、陬操を作為し、以て之を哀しむ。而して衛に反り、蘧伯玉の家を主とす。他日、靈公、兵陳を問う。孔子曰く、「俎豆 (俎は祭祀の時に犠牲を載せる台、豆は肉を盛るたかつき) の事は嘗て之を聞く。軍旅の事は未だ学ばざるなり。」明日、孔子と語り、蜚鴈を見、仰ぎて之を視、色孔子に在らず (顔色からして意識が孔子に向いていない)。孔子遂に行り、復た陳に如く。夏、衛の靈公卒し、孫の輒を立つ。是を衛の出公と為す。六月、趙鞅、太子蒯聵を戚に内る。陽虎、太子をして綯 (ブン、喪を発する前にかむる頭巾) せしめ、八人衰絰 (サイ・テツ、喪服) し、衛自り迎うる者と偽り、哭して入り、遂に焉に居る。冬、蔡、州來に遷る。是の歳、魯の哀公三年にして、孔子年六十なり。齊、衛を助けて戚を困む。衛の太子蒯聵の在せしを以ての故なり。夏、魯の桓・釐の廟燔く、南宮敬叔、火を救う。孔子、陳に在りて、之を聞き、曰く、「災

は必ず桓・釐の廟に於いてせんか。」已にして果たして然り。秋、季桓子病み、輦（レン、手押し車）して魯の城を見、喟然として歎じて曰く、「昔、此の国は幾んど興らんとせしが、吾、罪を孔子に獲しを以て、故に興らざりしなり。」顧みて其の嗣康子に謂いて曰く、「我、即し死なば、若必ず魯に相たらん。魯に相たれば、必ず仲尼を召せ。」後数日して、桓子卒し、康子代わりて立つ。已に葬り、仲尼を召さんと欲す。公之魚曰く、「昔、吾が先君之を用いて終えず、終に諸侯の笑いと為る。今又、之を用いて、終わること能わずんば、是れ、再び諸侯の笑いと為れり。」康子曰く、「則ち誰をか召して可ならん。」曰く、「必ず冉求を召せ。」是に於いて使いをして冉求を召さしむ。冉求将に行かんとし、孔子曰く、「魯人の求を召すは、之を小用するに非ず。将に之を大用せんとするなり。」是の日、孔子曰く、「帰らんか帰らんか、吾が党の小子、狂簡にして、斐然（もようのある美しさ）として章を成せり（もようがあつて美しく織られている）。吾、之を裁する所以を知らず。」子貢、孔子の帰るを思うを知り、冉求を送り、因つて誠めて曰く、「即し、用いられなば、孔子を以て招くを為せ。云う。」冉求既に去り、明年、孔子、陳自ら蔡に遷る。蔡の昭公、将に呉に如かんとす。呉、之を召せばなり。前に、昭公、其の臣を欺きて周來に遷り、後に、将に往かんとす。大夫復た遷らんことを懼れ、公孫翩（ヘン）昭公を射て殺す。楚、蔡を侵す。秋、斉の景公卒す。明年、孔子、蔡自ら葉（ショウ）に如く。葉公、政を問う。孔子曰く、「政は遠きを来し邇（ちかい）きを附くるに在り。」他日、葉公、孔子を子路に問う。子路對えず。孔子、之を聞きて、曰く、「由や、爾何ぞ對えて曰ず、其の人と為りや、道を學びて倦まず、人を誨（おしえる）て厭わず、憤りを發して食を忘れ、樂しみて以て憂いを忘れ、老いの將に至らんとするを知らずと、爾云う（しかいう、上の文をまとめて、文を結ぶ言葉）。」葉を去り、蔡に反る。長沮・桀溺、耦（グウ、集解：鄭玄曰く、耜の広さは五寸、二耜を耦と為す。二人並んでの意）して耕す。孔子、以て隱者と為し、子路をして津を問わしむ。長沮曰く、「彼の輿を執る者を誰と為す。子路曰く、「孔丘と為す。」曰く、「是、魯の孔丘か。」曰く、「然り。」曰く、「是、津を知らん。」桀溺、子路に謂いて曰く、「子は誰と為す」曰く、「仲由と為す。」曰く、「子は孔丘の徒か。」曰く、「然り。」桀溺曰く、「悠悠たる者は、天下皆是なり（悠悠と流れて反つてこない水と同じように、天下もそうである）。而るを誰をか以て之を易えん。且つ其の人を辟くるの士（先人の聖王の教えに従わない王は避けて仕えない人、即ち孔子を指している）に従うよりは、豈に世を辟くるの士に従うに若かんや。」耜（ユウ、種を蒔いて土をかぶせてならすこと）して輟（やめる）めず。子路、以て孔子に告ぐ。孔子、憮然と

して、曰く、「鳥獸は與に羣を同じうす可からず。天下に道有らば、丘、與に易えざるなり。」他日、子路行く、蓀（あじか）を荷う丈人（老人）に遇う、曰く、「子、夫子を見しか。」丈人曰く、「四体勤めず、五穀分かたず（分けて植える）、孰をか夫子と為す。」其の杖を植（たてる）てて芸（くさぎる、草を除く）る。子路以て告ぐ。孔子曰く、「隱者なり。」復た往けば、則ち亡し。孔子、蔡に遷りて三歳、呉、陳を伐つ。楚、陳を救い、城父に軍す。孔子の陳・蔡の間に在すを聞き、楚、人をして孔子を聘せしむ。孔子、將に往きて礼を拝せんとす。陳・蔡の大夫謀りて曰く、「孔子は賢者なり、刺譏（非難する）する所は皆諸侯の疾（欠点）に中れり。今、久しく陳・蔡の間に留まる。諸大夫（陳、蔡の大夫）設け行かう所は、皆仲尼の意に非ず。今、楚は大国なり。来たりて孔子を聘す。孔子、楚に用いられなば、則ち事を用うる大夫は危うからん。」是に於いて、乃ち相い與に徒役を發して、孔子を野に困む。行くを得ず。糧を絶つ。従者病むも（憂うの意）、能く興（起つ）つ莫し。孔子、講誦弦歌して衰えず。子路、慍（うらむ、世をうらむ）み、見えて曰く、「君子も亦窮すること有るか。」孔子曰く、「君子、固より窮す、小人窮すれば、斯（すなわち）ち濫す（濫溢、度を越すこと）。」子貢色作（おこる）る（顔色が変ること）。孔子曰く、「賜、爾は予を以て多く学びて之を識（しるす）す者と為すか。」曰く、「然り、非なるか。」孔子曰く、「非なり。予は一を以て之を貫けり。」孔子、弟子に慍心有るを知り、乃ち子路を召して問いて曰く、「詩に云う、兕（ジ、野牛）に匪（非に同じ）ず、虎に匪ず、彼の曠野に率（したがう）う、と。吾が道は非なるか、吾、何為すれぞ此ここに於いてすか。」子路曰く、「意うに吾未だ仁ならざるか。人の我を信ぜざるは、意うに吾未だ知らざるか、人の我を行かせざるは。」孔子曰く、「是れ有らんや、由や、譬ば仁者をして必ず信ぜしめば、安んぞ伯夷・叔斉有らん。知者をして必ず行かさしむれば、安んぞ王子比干有らん。」子路出で、子貢入りて見ゆ。孔子曰く、「賜や、詩に云う、兕に匪ず、虎に匪ず、彼の曠野に率う、と。吾が道は非なるか、吾、何為すれぞ此ここに於いてすか。」子貢曰く、「夫子の道は至大なり、故に天下能く夫子を容るるもの莫し。夫子、蓋（なんぞ）ぞ少しく貶せざる。」孔子曰く、「賜や、良農は能く稼す（種を播きつける）、而れども穡（収穫）を為すこと能わず。良工は能く巧みなり、而れども順を為す（人の意に従う）こと能わず。君子は能く其の道を脩め、綱して（大綱をたてる）、之を紀とし、統べて之を理とす、而れども容れらるるを為すこと能わず。今、爾は爾の道を脩めずして、而も容れらるるを為すを求む。賜、而の志は遠からず（遠大ではない）。」子貢出でて、顔回入りて見ゆ。孔子曰く、「回や、詩に云う、兕に匪ず、虎に匪ず、彼の曠野に率う、

と。吾が道は非なるか、吾、何為すれぞ此ここに於いてすか。」顔回曰く、「夫子の道は至大なり。故に天下能く容るるもの莫し。然ると雖も、夫子、推して之を行え。容れられざるは、何ぞ病えん。容れられざるして然る後に君子を見る。夫れ道の脩まらざるは、是れ吾が醜なり。夫れ道は既に已にして大いに脩まりて用いられざるは、是れ国を有つ者の醜なり。容れられざるは、何ぞ病えん。容れられざるして然る後に君子を見る。」孔子、欣然として笑いて曰く、「是れ有るかな、顔氏の子よ、爾をして財多からしめば、吾、爾の宰と為らん。是に於いて子貢をして楚に至らしむ。楚の昭王、師を興して孔子を迎え、然る後に免れるを得たり。昭王、将に書社の地七百里を以て（索隱曰く、古は二十五家を里と為し、里は則ち各々社を立つ。則ち書社とは、其の社の人の名を籍に書すなり、蓋し七百里を以て社の人を書して孔子に封ずるなり。）孔子に封ぜんとす。楚の令尹子西曰く、「王の諸侯に使わせしむるに、子貢の如き者有るか。」曰く、「有る無し。」「王の輔相に、顔回の如き者有るか。」曰く、「有る無し。」「王の将率（将帥）に子路の如き者有るか。」曰く、「有る無し。」「王の官尹（官吏の長）に宰予の如き者有るか。」曰く、「有る無し。」「且つ楚の祖は周に封ぜられて、号して子男と為し、五十里なりき。今、孔丘、三五の法（三皇五帝の教え）を述べ、周召（周公旦と召公奭）の業を明らかにす。王、若し之を用いなば、則ち楚は安んぞ世世堂堂（意のままに勢いを振舞う）として方数千里を得んや。夫れ文王は豊に在り、武王は鎬に在り、百里の君にして卒に天下に王たり。今、孔丘、土壤に抛るを得、賢弟子、佐と為らば、楚の福に非ざるなり。」昭王乃ち止む。其の秋、楚の昭王、城父に卒す。楚の狂接輿（狂人のように振舞っている接輿なる者）歌いて孔子に過り、曰く、「鳳や鳳や、何ぞ徳の衰えたる（鳳凰よ、こんな乱世に現れてくるとは、何とお前の徳も衰えたことか。孔子を指している）。往者（過去の行い）は諫む可からず、來者（未来の行い）は猶ほ追う可し。已みなん、已みなん。今の政に従う者は殆（あやうい）し。」孔子、下りて、之と言わんと欲す。趨りて去る。之と言うを得ざりき。是に於いて孔子、楚自ら衛に反る。是の歳や、孔子年六十三にして、魯の哀公六年なり。其の明年、呉、魯と繪に会し、百牢を徴す（豚、羊、牛の料理を一牢とする）。太宰嚭（ヒ）、季康子を召す。康子、子貢をして往かしむ。然る後已むを得たり。孔子曰く、「魯・衛の政は兄弟なり（兄弟のように似ている）。」是の時、衛君輒の父は立つを得ずして、外に在り。諸侯、数々以て讓むるを為す。而して孔子の弟子多く衛に仕う。衛君、孔子を得て政を為さんと欲す。子路曰く、「衛君、子を待ちて政を為さば、子将に奚（なに）をか先にせん」とす。」孔子曰く、「必ずや名を正さん。」子路曰く、「是有るかな、

子の迂（迂遠）なるや。何ぞ其れ正さん。」孔子曰く、「野（孔安国曰く、野は達せざるなり）なるかな由や、夫れ名、正しからざれば、則ち言は順ならず（言葉が適合でない）、言順ならざれば、則ち事成らず、事ならざれば、則ち礼樂興らず、礼樂興らざれば、則ち刑罰中らず、刑罰中らざれば、則ち民は手足を錯（おく）く所無し（安息することができない）。夫れ君子は之を為せば必ず名づく可し、之を言えれば必ず行いう可し。君子は其の言に於いて、苟くもする所無きのみ。」其の明年、冉有、季氏の為に師を將いて、斉と郎に戦い、之に克つ。季康子曰く、「子の軍旅に於けるは、之を学べるか、之を性にするか。」冉有曰く、「之を孔子に学べり。」季康子曰く、「孔子は何如なる人ぞ。」對えて曰く、「之を用いれば名あり（国の名声が上がる）。之を百姓に播（布く）きて、諸を鬼神に質しても、憾する無し。之を求むれば此の道に至る。千社を累（ねかさねる）ぬと雖も、夫子は利とせざるなり。」康子曰く、「我、之を召さんと欲す。可ならんか、」對えて曰く、「之を召さんと欲せば、則ち小人を以て之を固（いやしむ）むこと毋くして、則ち可ならん。」而して衛の孔文子、將に太叔を攻めんとして、策を仲尼に問う。仲尼、知らずと辞し、退きて載を命じて行かんとし、曰く、「鳥、能く木を択ぶ、木、豈に能く鳥を択ばんや。」文子、固く止む。会々季康子、公華・公賓・公林を逐い、幣を以て孔子を迎う。孔子、魯に帰る。孔子の魯を去りて、凡そ十四歳にして魯に反る。魯の哀公、政を問う。對えて曰く、「政は臣を選ぶに在り。」季康子、政を問う。曰く、「直を挙げて諸を枉（まがる）れるに錯（おく）けば、則ち枉れる者は直し。」康子、盜を患う。孔子曰く、「苟くも子が不欲ならば、之を賞すと雖も窃まず。」然れども魯、終に孔子を用うる事能わず。孔子も亦た仕うるを求めず。孔子の時、周室、微にして礼樂廢れ、詩書缺く。三代（夏・殷・周）の礼を追迹し、書伝を序で、上は唐虞（唐は帝堯、虞は帝舜）の際を紀し、下は秦繆（秦の繆公）に至るまで其の事を編次す。曰く、「夏の礼は吾れ能く之を言うも、杞、徴するに足らざるなり（禹の後裔が封ぜられた国杞にもそれを証明するものはない）。殷の礼は吾れ能く之を言うも、宋、徴するに足らざるなり（宋は殷の紂王の諸兄微子啓が封ぜられた国）。足らば、則ち吾れ能く之を徴とせん。」殷夏の損益（取捨増減）する所を觀て、曰く、「後に百世と雖も知る可きなり。一文一質を以てす。周、二代を監み、郁郁乎（美しく盛んな形容）たる文なるかな。吾れは周に従わん。」故に書伝、礼記は孔子自りす。孔子、魯の太師に語る、「樂は其れ知る可きなり。始め作（おこる）るや翕如たり（キュウ・ジョ、音がそろっていること）、之を縦つや純如たり（樂器を鳴らすと相い調和して一つのような）、皦（キョウ）如たり（各樂器の音節が明らかである）、繹

(エキ) 如たり (相い続いて余韻があること)、以て成る。吾れ衛自ら魯に反り、然る後に樂は正しく (魯に帰るまでに得た知識を魯に伝えたので、魯の音楽が正しくなった)、雅頌 (雅樂と宗廟の頌歌) は各々其の所を得たり。」古は詩三千余編、孔子に至るに及びて、其の重なれるを去て、礼義に施す可きを取り、上は契・后稷 (契は殷の祖、后稷は周の祖) に采り、中は殷周の盛んなるを述べ、幽厲の缺けたるに至り、衽席 (しとね、手近なことを指す) より始る。故に曰く、「関雎 (『詩経』国風周南の最初の詩) の乱、以て風の始めと為し、鹿鳴 (『詩経』小雅の最初の詩) を小雅の始めと為し、文王 (大雅の最初の詩) を大雅の始めと為し、清廟 (周頌の最初の詩) を頌の始めと為す。三百五篇、孔子皆之を弦歌し、以て韶 (舜帝の樂) 武 (周の武王の樂) 雅頌の音に合わんことを求む。礼樂、此れ自ら得て述ぶ可き、以て王道を備え、六芸 (礼・樂・射・御・書・数) を成す。孔子、晩にして易を喜 (このむ) む。序・彖 (タン)・繫・象・説卦・文言あり。易を読むに、韋編 (竹簡を綴るためのなめし皮の紐)、三たび絶つ。曰く、「我に数年を假し、是の若くせば、我、易に於いては彬彬 (ヒン・ビン、文と質が調和して美しい) たらん。」孔子、詩書礼樂を以て教え、弟子は蓋し三千、身、六芸に通ずる者七十有二人あり。顔濁鄒が如きの徒は、頗る業を受くる者甚だ衆し。孔子、四つを以て教う、文 (学問)・行 (礼の実行)・忠 (真心を尽くす誠)・信 (人を欺かない誠) なり。四つを絶つ、意 (主観的な思い) 母く、必 (無理やりに行うとすること) 母く、固 (頑固でかたくなな心) 母く、我 (我執) 母し。慎む所は、斉 (斎でのいみ)・戦・疾。子、罕 (まれ) に利と命と仁とを言う。憤せざれば啓せず (学ぶ者が発憤しなければ、啓発しない)、一隅を挙げて三隅を以て反らざれば、則ち復びせざるなり。其の郷党に於けるや、恂恂 (恭順で素朴) たりて、能く言わざる者に似たり。其の宗廟朝廷に於けるや、弁弁 (能弁ではっきりしゃべる) として言い、唯だ謹むのみ。朝 (朝廷) に、上大夫と言え、閭 (ギン) 閭如たり (孔安国曰く、中正の貌なり)、下大夫と言え、侃 (カン) 侃如たり (孔安国曰く、和み楽しむ貌)。公門 (王宮の一番表の大門) に入れば、鞠躬如たり (上半身を曲げて畏れ慎むこと)、趨り進めば、翼如たり。君、召して儻 (国賓を接待する君主の介添え役をする) せしむれば、色勃如たり (厳かな顔つきに変わる)。君命じて召せば、駕を俟 (まつ) たずして行く。魚餒 (イ、ただれる、魚肉の鮮度が落ちてくずれること) れ、肉敗れ (獣肉の鮮度が落ちて筋目の乱れたもの) 割 (きる) ること正しからざれば、食らわず。席正さざれば (敷物の乱れを正さなければ)、坐せず。喪有る者の側に食すれば、未だ嘗て飽かざるなり (飽食しない)。是の日哭すれば、則ち歌わず。斉衰 (シ・サイ、母

のための喪服)、瞽者を見れば、童子なりと雖も必ず変ず（悲しみに顔色が変わる）。「三人行けば、必ず我が師を得（三人が行動を共にすれば、善きことは従い、善くないことは改めて、我が師とする）。徳の脩まらず、学の講ぜざる、義を聞いて従ること能わず、不善、改むること能わず、是れ我が憂いなり。」人をして歌わしめ、善ければ、則ち之を復びせしめ、然る後に之に和す。子は怪・力・乱・神を語らず。子貢曰く、「夫子の文章は、聞くを得可きなり（先生の教えは、美しく明らかな形で表現されるので、耳目を以て学ぶことができる）。夫子の天道と姓名を言うは、聞くを得可からざるのみ。」顔淵、喟然として歎じて曰く、「之を仰げば彌々（いよいよ）高く、之を鑽（きる）れば彌々堅し。之を瞻（みる）れば前に在り、忽焉（たちまち）として後ろに在り。夫子、循循然として（順序次第を設けて）善く人を誘（みちびく）き、我を博むるに文を以てし、我を約するに礼を以てし、罷めんと欲すれども能わず。既に我が才を竭くす。立つ所有りて卓爾（優れてしっかりと立つ形容）たるが如し。之に従わんと欲すと雖も、由蔑（なし）きのみ。」達巷党の人、（童子、衍字）曰く、「大なるかな孔子、博く学びて、而も名を成す所無し（六芸のどれか一つでは言い尽くせない）。」子、之を聞いて曰く、「我、何をか執らん、御を執らん、射を執らん、我、御を執らん。」牢曰く、「子云えり、試（もちいる）られず、故に芸有り、と。」

481 魯の哀公十四年春、大野に狩す。叔孫子の車子（馬車を司る微賤の士）鉏商、獸を獲たり。以て不祥と為す。仲尼、之を視て、曰く、「麟なり。」之を取りて、曰く、「河は凶（予言の書で、凶讖）を出ださず（孔安国曰く、聖人、命を受けなば、則ち河、凶を出だす、今此の瑞無し）、雒は書（緯書）を出ださず、吾、已んぬるかな（見ていない）。」顔淵死して、孔子曰く、「天、予を喪すか。」西に狩して麟を見るに及びて、曰く、「吾が道は窮せり。」喟然として歎じて曰く、「我を知るもの莫きか。」子貢曰く、「何為れぞ子を知るもの莫きか。」子曰く、「天を怨まず、人を尤（とがめる）めず、下学して（人の世の人事を学ぶ）上達す（天命を悟る）。我を知る者は其れ天か。其の志を降さず、其の身を辱めざるは、伯夷・叔齊か。」柳下恵・少連を謂う、志を降し、身を辱む、と。虞仲・夷逸を謂う、隠居して、放言し、行いは清に中り、廢は權に中る（行いは清廉にかない、自らを捨て去るにも時宜を得ていた）、と。「我は則ち是に異なり、可も無く、不可も無し。」子曰く、「弗るか弗るか、君子は、世を没して、名、称せられざるを病む。吾が道は行われず、吾、何を以てか自ら後世に見われんや。」乃ち史記に因りて春秋を作る。上は隱公に至り、下は哀公の十四年に訖（おわる）り、十二公なり。魯に抛り、周を親しむ。殷を故とし、之を三代に

運らす。其の文辞を約にして、而も指（むね、旨に通ず）は博し。故に呉・楚の君は自ら王と称せしも、而れども春秋には之を貶して子と曰う。踐土の会は実に周の天子を召す。而して春秋は之を諱みて曰う、天王、河陽に狩す、と。此の類を推し、以て当世を繩（ただす）し、貶損の義あり。後に王者有りて挙げて之を開き、春秋の義行われなば、則ち天下の乱臣賊子懼れん。孔子、位に在りて訟を聴くや、文辞（訴訟の文章）人と共にす可き者有れば、独り有せざるなり。春秋を為るに至り、筆すべきは則ち筆し、削るべきは則ち削る。子夏の徒、一辞を賛すること能わず（子貢は孔子の弟子の中でも文学に優れていた、その子貢でさえ一語も手助けできなかった）。弟子、春秋を受く。孔子曰く、「後世に丘を知る者は春秋を以てせん、而して丘を罪する者も亦た春秋を以てせん。」明歳、子路、衛に死す。孔子病む。子貢、見ゆるを請う。孔子、方に杖を負い、門に逍遥す。曰く、「賜よ、汝の来ること何ぞ其れ晚きや。」孔子、因って歎じて、歌いて曰く、「太山壊れんか、梁柱摧（くだく）けんか、哲人萎えんか。」因って以て涕下る。子貢に謂いて曰く、「天下に道なきこと久し。能く予を宗とする莫し。夏人は殯（ヒン、かりもがり）するに東階に於いてし、周人は西階に於いてし、殷人は両柱の間に於いてす。昨暮、予夢に、坐して両柱の間に奠（テン、供物を霊前にすすめる）せられき。予、始め殷人なり。」後、七日して卒す。

- 479 孔子年七十三、魯の哀公十六年四月己丑を以て卒す。哀公、之を誄（ルイ、弔辞）して曰く、「旻天（ビン・テン、天帝）弔（あわれむ）まず（天帝は私を憐れんでくださらない）、愍（強いる）いて一老（孔子を指す）を遺し、余一人を屏け以て位に在らしめず。煢煢（ケイ・ケイ、孤独）として余、疚に在り。嗚呼、哀しきかな、尼父、（先生を手本として）自ら律する母し。」子貢曰く、「君、其れ魯に没せざらんか。夫子の言に曰く、『礼失えば則ち昏し、名失えば則ち愆（ケン、あやまちたがうこと）つ。志を失うを昏と為し、所（それぞれに応じた正しい位）を失うを愆と為す。』生きて用うる事能わず、死して之を誄するは、礼に非ざるなり。余一人と称するは、名に非ざるなり（天子の呼称であつて、諸侯が使うものでない）。」孔子、魯の城北の泗上に葬る。弟子皆服すること三年。三年の心喪（喪服を着ないで喪に服すこと）畢り、相い訣（わかれる）れて去らんとし、則ち哭し、各々復た哀しみを尽くし、或いは復た留まる。唯子貢のみ冢上に廬すること、凡そ六年、然る後に去る。弟子及び魯人の往きて冢に従いて家する者百有余室、因って命づけて孔里と曰う。魯、世世相い伝え、歳時を以て孔子の冢を奉祀す。而して諸儒も亦た孔子の冢に礼を講じ、郷飲（郷飲酒のこと、郷の優れた者を君に推薦する時に、郷大夫が開く送別

会) 大射 (射術大会の試験) す。孔子の冢は大きさ一頃なり。故と居りし所の堂と弟子内 (内は房、弟子の寝泊りする所) は、後世因って廟とし、孔子の衣・冠・琴・車・書を藏め、漢に至るまで二百余年絶えず。高皇帝 (漢の高祖劉邦)、魯に過り、太牢 (牛・羊・豕を使った一級の供物) を以て祀る。諸侯・卿相至るや、常に先に謁し、後に政に従う。孔子、鯉を生む、字は伯魚。伯魚、年五十、孔子に先だちて死す。伯魚、伋を生む、字は子思、年六十二。嘗て宋に困しむ。子思、中庸を作る。子思、白を生む、字は子上、年四十七。子上、求を生む、字は子家、年四十五。子家、箕を生む、字は子京、年四十六。子京、穿を生む、字は子高、年五十一。子高、子慎を生む、年五十七、嘗て魏の相と為る。子慎、鮒を生む、年五十七、陳王渉の博士と為る。陳の下に死す。鮒の弟子襄、年五十七。嘗て孝恵皇帝の博士と為り、遷りて長沙の太守と為る。長け九尺六寸。子襄、忠を生む、年五十七。忠、武を生む。武、延年及び安国を生む。安国、今の皇帝の博士と為り、臨淮の太守に至る。蚤くに卒す。安国、印を生む。印、驩を生む。

太史公曰く、「詩に之れ有り、『高山は仰ぎ、景行は行く (古人の高徳を仰ぎ慕い、平安な大道を進みゆく)。』至ること能わずと雖も、然れど心は之に郷往す (向かって進む)。余、孔子の書を読み、其の人と為りを想見す。魯に適き、仲尼の廟堂・車服・礼器と、諸生が時を以て礼を其の家に習うとを觀る。余、祗回 (テイ・カイ、徘徊すること。去り難い様子を表している) して、之に留まりて去ること能わざりき、と云う (云は衍字?)。天下の君王より賢人に至るまで、衆くは、時に當りては則ち榮え、没せば則ち已む。孔子は布衣にして、十余世を伝え、学者、之を宗とす。天子王侯自り、中国の六芸を言う者は夫子に折中 (折衷と同じ) す。至聖と謂う可きなり。」